



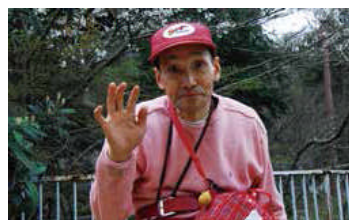
【無題】制作年不詳 段ボールに鉛筆、色鉛筆 295×360mm



【無題】制作年不詳
段ボールに鉛筆、色鉛筆
345×428mm



【無題】制作年不詳
段ボールに鉛筆、色鉛筆
330×382mm



小幡 正雄 Masao Obata

1943～2010年 /兵庫県

小幡さんは施設の給食調理室から拾ってきた生臭い段ボールを集めては、それに夜な夜な絵を描いて部屋にため込んでいました。

彼は描いた絵をベッドに積み上げ、大量の段ボールの片隅で小さくなって寝ていました。けれども大掃除のたびに大量の絵は捨てられてしまうため、彼は仕事の合間も数枚の絵を持ち歩いて描いていました。「絵を持ち歩くとぶつかって紙の角が痛むので、こうして角を丸く切っているんだよ」と彼は説明してくれました。彼は好きな絵を描くために、色々な工夫をしていたのです。

身寄りのない彼の人生にはなかった「結婚式の男女」や「家族」の絵がとても多いのですが、彼は絵を描くことで、ささやかな自分の夢をかなえていたのかもしれない。「男がいて女がいる。間にいるのは子どもさん。どれが欠けても駄目でしょう?」と、一所懸命に話していました。

他にも記憶の風景や乗り物、植物、部屋の家具など思いつままに描いていますが、いずれも彼の作り出した独特のスタイルで表現され、何かを見て描くということはまったくありませんでした。

色は何よりも赤が好きで、大半の絵は赤が中心になっています。自分が着ている服もベルトも靴もすべて赤色です。本当に徹底しているのです。

彼の絵は、たまたま施設の絵画指導に来ていた画家の目に留まり外部に紹介されるようになりました。それからは海外も含めて大人気。何度も展覧会が開かれるようになり、作品も保管されています。

小幡 正雄



『無題(結婚式)』制作年不詳
段ボールに鉛筆、色鉛筆
294×415mm